

●高澤良一 第六句集 燕音

●四月―六月

花屑こに小旋毛むじ風立ちぬ愛宕山

走り根に花屑の風堰かれけり

花筏などはとても云へぬもの

気が利いてルビが囀る日本語

その説に服しぬ花よ鳥よと詠む

入り鉄砲 出女 春風 出入りす

そら豆の花の勝手な思ひ込み

スイトピーつまらぬことは気にせず

干潟踏む素足の白くさみしけれ

折角の花が霞んで仕舞ひけり

このとほり櫻は場所を選ばない

ゆとりより生るゝものに花の風

初櫻先師に向ひ合ふごとく

好きな木を一つ挙げれば山櫻

櫻の幹叩き鼓舞せる男あり

楽しんでよるひるざくらあさざくら

夜ざくらを見にゆく元氣既になし

花は佳し桜しべまで見尽して

大櫻之ある哉の裁判所

春の水黙ってゐても春の水

まどろんで先師が花に遊べる図

門前の小僧のタチツボスミレかな

藤右衛門さんのはちまき花談義

花を見る心ええならええ花見

日本の櫻を他国に植う話

名庭園ならんとさくらの木も努める  
人間ソメイヨシノが構ってやって咲くさくら  
雨ありてあとは櫻の花次第  
振り返る桜がそこにあればなり  
沿線の桜見ながら汽車ぽっぽ  
曙の桜どの木も気を張りて  
人間の勝手放題花を見る  
わからんと云ひて笑へり櫻守  
花も又花を了へたら一服す  
年寄ったなりの咲き方桜もす  
咲く桜暦代りの世も絶へて  
花噴いてぼこんぼこんの桜の幹  
思ひも見よ山の桜の根の張り方  
地味ありて枝隆々の山櫻  
桜には桜の営みそを通す  
他愛なく花を見てゐる旅ごころ  
野暮天のソメイヨシノといふ勿れ  
昼下り自転車であつてさくら狩  
萍のとつき方といふがあり  
花開くまでいろいろな事があり  
小粋とは物は云ひやうぺんぺん草  
花降れる地べたに雀色動く  
気ふさぎの重たき花となりけり  
垂直に上枝に移る花の鳥  
ひんやりと手の甲に当つ春の草  
二輪草あらくさ雑草一つ交へずに  
花咲くと鳥もすっかりその気になり

鈍器もて物を割る音花曇り

嘴のずんと重たき花曇り

念を押すごとくに春の雷鳴れり

ものの芽どきその辺歩いてくるといふ

思ひ切り悪き女やヒヤシンス

蹠のたわたわ花屑踏みつけに

祖光浄稔信士と余寒の掌になぞる

一卷の終りの花の水に散る

男気の筍の反りおのづから

根っからの浜っ子野毛の桜見に

海浜の雨は曲者花散らす

御本尊どぜう髯もて仏生会

何事ぞ牡丹を寺の囲ひもの

雪柳三千世界此処にあり

祖師さまの山へのぼらん桜どき

もう十年程ご一緒にさくらの世

来年も又来ておくれ花の鳥

だらしなさ小児に同じ紫木蓮

一わたり歩き身延の沢櫻

土筆打ちたたき出したる青煙

紫荊己を通す色見たり

すずめのでっぼう東毎山の田を返す

花を押す南アルプスよりの風

花の鳥あれこれいふを聞き遣りぬ

花の下先師のおはち頭かな

土筆摘む音のつくづく真昼かな

シーソーの花屑吹いて跨りぬ

青空へ一二三と飛花発ちて  
田に引ける水音すずめのてっぼうに  
田の隅にぺんぺん草の丈を得て  
クレソンの根方素通りせる水音  
ぽんぽんと山桜置き遠山並み

いのちなが  
寿 身延詣での紅支垂

花見客杖を忘れし身延線  
緋の桃に近寄り過ぎぬ心拍音  
糸櫻糸よりかけて身延山  
法燈の山桜いろ夕づきぬ  
雨脚の忽ち千筋花きぶし  
老若の一切を度す花の風  
本山の飛花つきあたる堂障子  
むくむくと大善坊の毛虫かな  
身延山ひたすら空を亘る飛花  
飛花よぎりけり北之坊岸之坊  
うぐひすのこゑの又せり坊隣り  
久遠寺の南無妙鶯ほうほけ経  
当山の門徒ならねど桜狩  
川原石の隙を見つけて花の塵  
接骨木の花まぎれんとしてゐたり  
身延山花冷からかね灯籠に  
白妙の昇竜となり糸櫻  
登り詰め櫻吹雪の別天地  
夏は来ぬ焼津の海の魚光ととり  
浅草のカツ弁色の神輿かな  
茹でごごみには鯉節ぶっかけて

たいがいにしろや牡丹の覗き見は  
地のものこれ一品と云へば蛸  
齡なりに私も頑固筍飯  
あめふらし好すいた事して潮溜り  
磁石の針大きくふれる五月山  
襟立てて越後湯沢の木の芽どき  
残雪秋山郷と越後訛りが耳元で  
畑隅の雪間の桐のつくねんと  
凡庸な芽吹きの色でありにけり  
豪雪の爪跡芽木に残りけり  
谷川の水飛沫して五月空  
朴芽吹き谷川の水段きだ為して  
秋山郷赤湯に春を惜しみけり  
小赤沢部落駆け抜け雪解水  
奥山のさくらは白く春づける  
白樺の芽吹き朝日に眩くごと  
わさ和山温泉び沢わさび養ふ水鳴れり  
すも津南も咲く飯山線信濃白鳥しなのしちとりたもとほる  
鬼くるみぼつつり芽吹く千曲川  
りんごの飛花あれよあれよと千曲川  
蒔正受庵きものを烏ほじくる正受庵  
葉ざくらに葉ざくらのいろ正受庵  
山吹の黄を突っ切りて正受庵  
菜柏原の花の空ゆく雲も一茶風  
春の蠅探せばをりぬ俳諧寺  
春の蠅何をするかと見てをりぬ  
春の蠅一挙手一投足の妙

一茶坊の生地たねつけ花の盛り  
くらくらと花菜の中を歩きけり

一茶堂蠅虎が戸袋に

継り来るかがんぼに胸貸しにけり

日の永く一つ目妖怪困碁打図

緑さす鴻山妖怪財布かな

サイクリングりんごの花の高さゆく

月くりくりりんごの花の薄闇に

画狂老人真筆雪中筍狩

菜の花に北信五岳月夜かな

あっぱれなりんごの花の八分咲き

雪山に沿ふてりんごの花街道

昼蛙腹の底より啼くが佳し

蛙合戦見守る此処が上席ぞ

鬼無里村河鹿謡へり鬼女紅葉

代田水息せききって駆け込めり

虎杖をへし折りゆけり鬼無里の子

戸隠山の裏手雪間の露のしゅうとめ

田蛙のカララ躰に共鳴す

がしと雪踏みしめ見入る水芭蕉

水芭蕉乾きし泥を揉み落とす

水芭蕉そこはゆっくり水流れ

山水に凱歌を挙ぐる水芭蕉

水芭蕉山水くびれ流れけり

二タ三搔き股ひろげ浮く山蛙

真昼間の山雪のうへ蜘蛛あるく

水芭蕉林中に水響きけり

もう一つ顔乗り出しぬ水芭蕉

水底に倒木透けり水芭蕉

オオルリのこの森深しといふごとし

せせらぎに木五倍子そろそろ花を垂れ

ミドリ虫鞭毛使ふこどもの日

仁丹の看板健在植田中

空梅雨の下駄箱の戸をがらがらり

一生を棒にふりたるあめふらし

白詰草いちめん水上バス乗り場

翼打つ音のばっさり夏空より

ヒブダイの佳人とりわけ歯が見事

夏痩せてハダカイワシのご面相

のうのうと髯のオジサン泳ぎけり

この槽ふねのウマヅラハギでござんすよ

涼しさもその名からしてユカタハタ

ひょうきん者ねずみ泳ぎのネズミフグ

力泳のその名もウケグチイトウダイ

ボンネットヘッドシャークの涼気過ぐ

目元涼しく「私カタクチイワシです」

竜宮の森を散策大海馬

絵師清方鍋木清方美術館風も描きて納涼図

背鰭にて浮葉撥ね上げ池の主

馬鈴薯の花半島は曇り出す

舟虫に危害加えることなんぞ

ふなばたを這ひて房ぼうしゆう州ぼう法螺貝ほらの脚

タカノハ鯛大きく息す南風の中

刺網にかかるがらくた蜘蛛人手

舟虫の梁山泊を覗きけり  
夜叉五倍子の青実南風にごつつんこ  
潮吹のほの明るさを掌にしたり  
枇杷黄ばむほの明るさに百日忌